

博士学位論文審査要旨

2022年6月28日

論文題目： 児童養護施設で育つ子どもへの自立支援の課題
-ソーシャルワークにおけるレジリエンス概念を手がかりに-

学位申請者： 梅谷 聡子

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 木原 活信

副査： 社会学研究科 教授 空閑 浩人

副査： 大阪公立大学大学院現代システム科学研究科 教授 伊藤 嘉余子

要 旨：

本論文は、児童養護施設（以下、施設）で育つ子どもが「自立」に向かうために必要な自立支援の課題を明らかにしたものである。ここで言う自立とは「自己の尊厳を保持し、他者と関わり合い、頼り合うことを通して、社会との繋がりを持つこと」と定義されるものである。その際、施設入所時点ですでに困難を経験している子どもたちが回復に至るプロセスに着目し、特にソーシャルワークにおけるレジリエンス概念を援用しつつ議論した。

第1章では、レジリエンスの概念について先行研究の批判的検討をした。レジリエンスとは「困難に直面した時、あるいは困難に直面した後に、期待以上の結果をもたらす人と環境の相互作用のプロセス」であるが、施設の子どもの貧困や虐待等の困難の背景には社会の構造的な問題による世代間連鎖があることから、レジリエンスが重要であることを示した。

第2章では、施設退所者の10人のライフストーリーから、退所者の自立の意味を生成するプロセスを検討した。退所者は、生活困窮、ネグレクト、暴力被害、施設入所中の理不尽な経験などを、自ら意味づけをして再構成していた。暴力を受けていた当時の「自分が悪い」「怒られるのは自分の責任」と言うストーリーは、その後の肯定的な人間関係や様々な経験によって変化していた。つまり、施設退所者は、絶えず様々な人間関係や環境との相互作用の中で、自らの経験の意味付けを変化させていることを明らかにした。

第3章では、施設職員にインタビュー調査し、子どもの被虐待経験等による自己肯定感の低さ、入所中の施設生活と一般家庭の生活の乖離、退所後の孤立、施設で育つ子どもの自立を阻む制度や、社会の多数派の社会的養護に対する認識などが、子どもの自立を阻む課題であることを明らかにした。

第4章では、アフターケアを行う相談員へインタビュー調査をし、子どもの自立を促す施設のインケアについて考察した。退所者の困難の背景にある要因と、問題解決に至る退所者の強みの分析により、「退所者自身が有する要因」、「退所後の環境要因」、「自立のプロセスにおける要因」が相互に影響し合い、「自立のプロセスにおける要因」に働きかけ、退所後、問題解決に至る強みを強化し、退所後の困難の背景となる要因を緩和・解消することを明らかにした。

以上、本論では、施設出身者、施設職員、アフターケア相談員への3つの質的調査から施設で育つ子どもたちの回復に至るプロセスに着目し、レジリエンス概念を援用しつつ、その自立の課題について明らかにした。調査協力者の偏り、ソーシャルワーク理論との関連づけなど幾つかの課題はあるが、著者の10年に及ぶ施設職員としての実践経験を踏まえた理論（言語化）であり、説得力のあるものであった。

よって、本論文は、博士（社会福祉学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2022年6月28日

論文題目： 児童養護施設で育つ子どもへの自立支援の課題
-ソーシャルワークにおけるレジリエンス概念を手がかりに-

学位申請者： 梅谷 聡子

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 木原 活信

副査： 社会学研究科 教授 空閑 浩人

副査： 大阪公立大学大学院現代システム科学研究科 教授 伊藤 嘉余子

要 旨：

2022年6月28日（火）午後3時より午後4時40分まで公開学術講演会を溪水館会議室において開催した。そして午後4時45分から午後5時45分まで口頭試問を溪水館社会福祉学科資料室において実施した。またこれに先立ち、同日午後1時より午後2時まで、語学試験（英語）を溪水館社会福祉学科資料室において実施した。

公開学術講演会では、審査委員3名を含む一般聴衆のまえて、提出された博士論文について論理的に説明することができた。またフロアからの質疑応答の時間においても明快に適切かつ丁寧に各質問に回答することができた。口頭試問では、専門分野（社会福祉学）において、博士学位取得者に相応しい能力と知識を有していることが確認された。語学試験においても、博士学位取得者に相応しい能力を有していることが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 児童養護施設で育つ子どもへの自立支援の課題
-ソーシャルワークにおけるレジリエンス概念を手がかりに-

氏名： 梅谷 聡子

要旨：

本研究の目的は、児童養護施設で育つ子どもが「自己の尊厳を保持し、他者と関わり合い、頼り合うことを通して、社会との繋がりを持つこと」と定義した「自立」に向かうために必要な自立支援の課題を明らかにすることにある。その際、入所時点ですでに困難を経験している児童養護施設で育つ子どもが回復に至るプロセスに着目するために、ソーシャルワークのレジリエンス概念を手がかりとした。

第1章では、本研究の考察を貫くレジリエンス概念について整理を行い、本研究におけるレジリエンスの定義を明らかにした。レジリエンス概念は、回復のプロセスを個人の内面に求めることによって、困難の背景にある社会の構造的な問題を等閑視する点が批判されている。児童養護施設の子どもの貧困や虐待等の困難の背景には社会の構造的な問題があることから、本研究では、ソーシャルワークのレジリエンス概念を「困難に直面した時、あるいは困難に直面した後におかれた社会状況、文化等の文脈において予期される以上の結果をもたらす人と環境の相互作用のプロセス」と定義した。「予期される以上の結果」という言葉については、レジリエンスの「結果」が文脈に依存する点を指摘した Van Breda (2018) の主張を参考として用いている。

第2章では、10人の児童養護施設退所者のライフストーリーから、退所者の自立のプロセスをレジリエンス概念を手がかりに検討した。退所者は様々な経験を通して、生活困窮、ネグレクト、暴力被害、施設入所中の理不尽な経験や挫折した経験などの意味づけを再構成していた。とりわけ、暴力を受けていた当時「自分が悪い」、「怒られるのは自分の責任」と思っていたと語られたストーリーは、その後の肯定的な人間関係の構築や児童福祉の専門的な知識を身につける等の経験によって、親からの暴力が不当なものであるというストーリーや、暴力を振るった家族の背景を相対化して語るストーリーへと変化していた。

一方で、退所者の語りの中には、現在の生活が充実しているから、辛い過去も“結果として良かった”と語ることができ、現在が苦しい状況だったら、自分の語り方も変わるだろうというものがあった。比較的安定した現在からライフストーリーを語ると、過去の困難も現在の安定した生活に続く経験であったと意味づけられる。これは、現在の状況から過去は語り直すことができ、語られるライフストーリーが回復の物語であれば、子ども期に虐待等の自身の存在を否定されるような困難を経験した子どもであっても、その後の生活の中で自らの存在や生きることを肯定できる可能性があることを示唆している。

しかし、それは退所者が切迫した状況を等閑視しているためではなく、自立のプロセスにおいて生活の基盤が比較的安定し、信頼できる人間関係を築き、退所者自身が有意義と感じられる様々な経験をしてきたために、回復のストーリーとして語る事が可能になったと考えられる。児童養護施設で育つ子どもへの自立支援は、困難を経験した子どもが自らのライフストーリーを回復の物語として語り直すことを可能にするために、「生い立ちの整理」等の子どもの出自を伝える取り組みと同時に、子どもや若者の生活全体が本人にとって充実したものとして経験されるような支援である必要があると考えられる。

第3章では、児童養護施設において子どもの自立支援の一端を担う施設職員が、児童養護施設の子どもの自立に対してどのような支援観（自立観）をもち、どのような支援を行なっているかを、施設職員へのインタビュー調査から明らかにした。分析の結果、子どもの被虐待経験等による【自己肯定感の低さ】や、入所中の施設生活と一般家庭の生活の乖離、【退所後の孤立】、児童養護施設で育つ子どもの自立を阻む制度や、社会の多数派の社会的養護に対する認識などが、子どもの自立を阻む課題として挙げられた。こうした状況の中で自立支援を展開する施設職員は、子ども自身が生活能力を身につけたり、精神的に成長することを支援する自立観のみならず、子どもが周囲の助けを得られるように支援する自立観を持っていた。

施設職員が語った子どもの自立の課題からは、児童養護施設の子どもの、幼少期のトラウマや社会的排除状態など複合する逆境の中にあることが示唆された。児童養護施設において行っている自立支援の分析結果では、入所施設である児童養護施設の実践は、多くの一般家庭の子どもがそうであるように、日常生活を通して子どもの自立を促すという役割がある。したがって、児童養護施設における自立支援の内容は、入所している間に子どものトラウマ等傷つきを癒やし、人を頼ることを含めて力を身に付けさせるといったものが語られた。一方で、児童養護施設職員が退所後の子どもの生活環境を積極的に調整したり、施設の子どもの退所者の困難を代弁するということが頻繁には語られなかった。しかし、子どもの自立の課題に【自立を阻む社会のあり方】が挙げられたように、退所後を見据えた、子どもの生活環境への介入や代弁は非常に重要であると考察した。

第4章では、アフターケアを行う相談員へのインタビュー調査から子どもの自立を促す児童養護施設のインケアについて次のリサーチクエスチョンに基づき考察した。①退所者はどのような困難に直面しているのか、②退所者の困難の背景にあるものは何か、③退所者はどのような強みを活かして困難に対処しているか、④インケアにおいて子どもの自立を促すために必要な支援とはどのようなものか。その結果、退所者の困難の背景には「退所者自身が有する要因」、「退所後の環境要因」、「自立のプロセスにおける要因」が相互に影響し合っていること。また、児童養護施設の自立支援は、「自立のプロセスにおける要因」に働きかけ、退所後、問題解決に至る強みを強化し、退所後の困難の背景となる要因を緩和・解消する必要があることが明らかになった。

子どもの自立のプロセスに効果的なインケアについて、分析結果と考察から以下の3点が示唆された。第一に、入所中の日常生活における子どもの主体性と経験の蓄積を基盤とした、生活習慣の習得、社会経験の蓄積、退所後も頼っても良いと子どもが思える関係や、子どもが条件付きでなく肯定される関係の構築等がどれほどなされるかが、退所後の困難や強みにまで影響すること。第二に、虐待や家族分離などの経験により、自らの存在の意味の不確かさ、すなわち生きることを絶対的に肯定された経験の乏しさのある子どもが、自らの生きる意味を見出すことができるようなインケアが望まれる。そのために、生い立ちの整理や【日常生活の中で主体性が育まれる】、【職員との信頼関係を築くことができる】が必要な支援であると考察された。第三に、職員の子どもの自立に関する援助観の醸成と社会資源の活用が必要と示唆された。インタビューにおいて職員の入所児童の進学に対する価値観の偏りや、社会資源に関する知識やその活用に関する技術の不足が指摘された。

以上の調査により、児童養護施設で育つ子どもの自立支援の課題について以下の点が明らかになった。

第一に、子どもと施設職員の「信頼関係」を築くことの重要性である。子どもと施設職員の信頼関係は、逆境経験により大人への不信感を抱いている子どもにとって、安心安全な生活を送ることや、愛着関係の形成を図る機会となる。また、入所中に職員との良好な関係があると、退所

後も施設に相談しやすい場合があり、アフターケアの資源として退所者に意味づけられるということが挙げられる。

第二に地域における自立支援の必要性である。子どもは施設の中だけで自立するというだけでなく、施設外の様々な関係の中で自立していくということが、各調査から明らかになった。すなわち、児童養護施設で育つ子どもの自立は、施設生活を基盤としつつも、学校や職場、近隣住民等、子どもが生活する地域の対人関係によって促されていた。つまり、児童養護施設で育つ子どもの自立支援は、施設内部の資源で完結するのではなく、地域の人々との関係性を活用して行われる必要性を示していると考えられる。この点において、児童養護施設で育つ子どもへの自立支援は、子どもへのミクロレベルの対人支援にとどまらない、学校、職場、地域等における人と環境の相互作用に介入するソーシャルワークとして実践される重要性が明らかになった。